

## 先生に拙文を捧げる

池 田 昭

佐木秋夫先生が逝かれた。心から哀悼の意を表したい。

いまや、先生は居られない。しかし、不思議なことにはその感じがしない。亡くなられてから、未だ僅かな日数しか経っていないせいかもしれない。

たんにそれだけであろうか。そうともばかりとは思えない。それ以上に、在りし日の先生の真理探究と実践の姿が鮮明に思い浮ぶからである。

先生がこの姿勢のエネルギーを、どちらかと云えば細身の小柄の御体のどこに秘められておられたのか、と思うほどである。

いま、今月の中旬に行われる第47回日本宗教学会学術大会のプログラムがある。ここには、先生の発表題目「ペレストロイカに見られる宗教の重要な歴史的本質について」がのっている。もし御元気でいたならば、先生の発表に接することが出来たはずであった。

私の記憶違いでなければ、私の学会に入会した1950年代後半以降には、先生は毎回研究発表を行い、休むことを知らなかった。しかし、残念なことにはいまとなっては、名誉会員になられた昨年の学術大会の発表が最後となって、本年の発表を聞くことが出来なくなってしまった。そうした

高令になるまで、研究に精励されたのである。

発表にいたっては、司会はもちろんのこと、居合わせる会員もしばし時の経つのを忘れ、内容に聞き入るのであった。目が悪いからではなく、明晰な頭脳から、発表のメモをもたずに課題に即し論理的に発表がなされた。そのせいか、質問はほとんどみられなかったのである。

こうした研究発表の風景は、多くの研究者の及び得ないところで、今後みられないことであろう。

研究内容は、たえず、アップ・ツー・デイトの問題にかかわっておられた。おそらく、先生の研究関心が現実に生きた民衆の思想にあったせいかもしれない。

新宗教の経験科学的研究の先駆者は、日本では先生であると思われる。いまでこそ、多くの研究者が新宗教にたづさわらようになっているが、1970年代までは極く僅かであった。先生は、そのなかの一人で、この研究の先陣をきっておられたのである。

先生の学風は、経験科学的視座を具えたもので、この視座はとくにマルクスのそれであった。諸学問の流行する今日、科学は現象を政治、経済、社会との関連のうちに位置づけ、その性格と因果関係を追求しなければならない、という基本的要請

があるが、先生の視座はこの科学の要請に答えようとするものであった。

この視座は、ときには現象の性格を鋭く浮き彫りにするため、現象の擁護者からは好意をもって受けいれられないものであった。けれども、先生はこの視座を堅持された。先生は、濁流に似た今日の学問の諸潮流のなかで一条の光を照らした研究者として、後世の研究者からも顧みられることと思われる。

先生が研究の視座を堅持された態度は、学界の日常的場にもみられた。

学界の総会、評議会、理事会における先生の態度は、これまた一貫したものであった。ときには、学界の範囲を超える発表があったが、多くは真摯に学問を追求する態度から発露したものであった。ここには、自己の勢力欲などは微塵もなく、真摯な学問追求即民主的学界運営を目差す以外の何もなかった。

新聞の死亡の報せで初めて、私は戦前の先生の若い時代の体験を知った。なかでも、「治安維持法」で検挙された事実である。

この法の厳しさは、「我ら少国民」世代に属する私には到底実感することが出来ないものであった。ただ、国家と新宗教との関係を学問のうでで追求するさいに知った知識に過ぎない。

けれども、この法の執行に当たった特高警察の無法ぶりを知っていた私には、この先生の事実は驚きであった。

この驚きはそれにとどまらない。先生は、御自身のこの体験を通じてこそ、戦後マルキストとして特定の職業に就くことなく、学問、人間の自由を守るために、学界の日常的場で孤軍奮闘の活躍をされたことである。この姿勢は、思想人として面目躍如たるものと云わねばならない。

口で「革新」を唱えることはやさしい。しかし、日常的場でこれを実践することはむづかしい。先生はこれを実践されたのである。

私には、これらの理論的、実践的態度には、先生の血筋に流れる武士の精神が生粋のマルキストとして生かされている、という感じがしてならない。